手藝論

中村その

一、前がき
二、我國女子手藝の歴史
三、手藝は女性美の表現
四、手藝の世界
五、カットウォークに就て
六、カットウォークの現在
七、カットウォーク製品とその輸出の狀態
八、カットウォーク作業の概要
九、指導者に對する願
十、手藝研究者に對する願
十一、手藝と圖案
十二、手藝の將來
十三、結び

一　前がき

文化の向上は總てが科學的となり、機械能率が尊重され多量製産化し、普及の進度が躍進するを本則と致します。

從つてその製品は劃一的で、精巧、美彩、實用經濟的でありますが、それだけにデリーメードたるを失いません。手藝品はその點全く違つております。何處迄も手工的で製作者の個性なり藝術的氣分が横溢してその情熱さ

へ融け込んだ香り高い製作品であることを特徴とします。

文化が向上すればする程人間はそれに反比例して、原始的な鄉愁を感じるものであります。これは何れの民族にも共通的な心理であります。手藝品はこの鄉愁を慰するに値するものであるだけに、多くの人々に賞用愛好されるのであります。

由來わが國民は手藝に秀でて、世界的に定評があるのであります。就中女性の手藝はその巧緻性の働きによつて、日本手藝の爲に一段の光彩を加へ、その製品は輸出の一翼となつて居るのであります。

以下少しく日本の手藝――その製品に就て論じることにいたします。

二　我國女子手藝の歷史

我國の女子の手藝の歷史は、文獻によりますと相當古くから發達しおりまして手藝に對する憧憬は手藝天女の信仰となり、赤守り神として崇められている狀況であります。斯のように手藝の總てが機械力に賴らないで、その時代時代の思想――風潮――嗜好を巧に取り入れて、情熱を指先に集めて器用になされる。創案――創造の手藝品は藝術的な高い香氣を放つものでありまして、その實證は奈良の正倉院の御物等に如實に物語つています。

即ち絢爛目を驚かす精巧緻密なものがあるかと思うと、他面素朴愛すものがあり、幽邃極まりなき製品ありと思へば、他方豪放言語に絶するの佳品逸品があるなど、手藝は千變萬化し、時代の流れ思想の變遷をよく物語つて居るのであります。

この貴重なる遺品、手藝の才能は眞に日本獨特のものであつて、容易に外國人の追隨を許さないのであります。私はこの日本女性の持つ傳統の手藝技能――巧緻性を一段と活用し高揚することによつて、その製品が世界的に讃仰憧憬するように。尙一段の努力と研究をなすべきが急務だと考へるのであります。

斯くすることによつて日本の貿易産業に偉大な貢獻をなすとともに、その藝術技能が後世の子孫への遺産たらしむることが、我々祖先に對する感謝の表現であるとの信念によつて只管手藝の道を歩んで居るのであります。

三　手藝は女性美の表現

手藝は女性に創造力を與へます、手藝は單なる指先きの技巧でなく、一つの藝術であります、藝術の究極の目的は申す迄もなく美であります。美は卽善であります。手藝は一つの職業（結果的にはそうであろうとも）的でなく、美への探究藝術精進であると自覺することによつてその製品は品位づけられ高價となるのであります。

眞に日本女性が手藝に專念して居る時は、精神的に沒我の境に這入つて、全智全能が指先きの働きに集注されてそこに巧まない自然の姿が現はれ、愛情が培はれ性は善歸し、法悅に似た悅びと滿足にひたり切つた平和の姿を現はすのであります。

私の知つて居る老齡な社會教育家である、男性のK先生から伺つたのには、「眞の女性の美しさは、巧まざる且又意識せない、自然のポーズである。この手藝熱中時程、崇高な美は他の何れの場合に於ても發見できない」と手藝は女性の美の表現であると極言されました。

成る程と肯定される批評辭であります、手藝は斯くの如く女性に美の感念を高揚させ品性を淨化させ教養の深さ知性の豐かさ情愛のやさしさを誘發訓致するものであります。

四　手藝の世界

女性によつて成さるゝ手藝の世界は、眞に多種多樣であります、例へば日本刺繍―カットウォーク―押繪―編物―組紐物―摘み細工―人形―等々廣汎で、その一つ一つにも用途に應じた構成法は多岐多樣に分れています。その用途毎にそれぞれの特徴なり特質を持つて居ります。

日本刺繍―押繪―は全く日本的な趣味―嗜好から生れ、且つ發達して來たものでありまして前者は衣料服飾或は室内裝飾に多く採用され、後者は主として飾り物に利用されてゐます。

又編物は利用範圍が廣汎で、衣料―携帶品―服飾品等に適用され、摘み細工は衣服や携帶品のアクセサリーに賞用され、人形は觀賞―玩具にことの外重寶されて居ります。

又カットウォクは、布地の平凡な單調を逸脫して、美觀と感觸を附與し、又實用的にも効果あらしめる、手藝の一部門であります。

五　カットウォークに就て

女性の手藝も前述の通り多種多樣に分れておりまして、その一つ一つにそれぞれの起源があり。歷史がありま

すので、これを詳述することは徒らに紙面を費すことになりますので、茲に近代趣味に富んだカットウォークを例にとつて若干の説明を試みることに致します。それは一つにはこのカットウォークは學校手藝として、他の手藝よりも一般的で、利用範圍も廣く、その趣味が世界的であるからであります。

元來このカットウォークは、日本古來のものでなく、その起源はフランス刺繍の一つとして、然も其の最高級に位して居るのであります。

日本に渡來したのは明治時代ではありましたが、盛になりましたのはフランス文化の輸入の最高調時、大正十年の頃であります。初め東京大阪の如き大都市に於て研究所が設けられ、物珍らしいとは言い乍ら、極めて小人數の研究生の手によつて始められたのが、時代の趣味に合致して次第に盛大となり、一時はカットウォークが、流行を支配するの觀を呈し、その製品は本場フランスを凌駕する、素晴らしい逸品を出す迄進歩し、製作技術は普及し、その製品は輸出する迄に至つたのであります。

六　カットウォークの現在

カットウォークは日本女性の持つ緻密—丹念—誠實—器用の性格に適合して、その優秀性は外國に迄公認せられ、輸出品の一種目なる迄に至つたのでありますが、不幸大東亜戰爭の突發によつて中斷の不已無きに至りましたことは、返す返すも遺憾の極みでありました。

然し終戰直後の國民虚脱の狀態から醒め、翌二十一年八月には、富山縣立染色試驗場に於て、いち早く戰前の

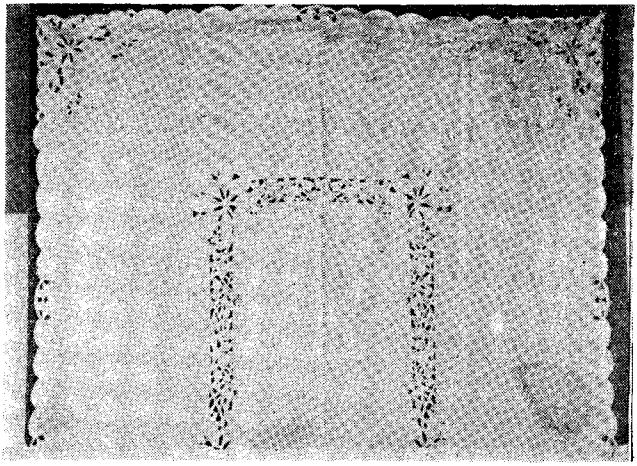
カットウォーク製品の輸出を想起し、これが復舊を圖るべく、先づ手藝技術の獲得を目標として、縣の協力を得講習會を開催し指導者養成を爲したのであります、幸にしてこの指導者の中には、カットウォーク界の先輩高橋宅男氏が居られたので、熱心に團體又は個人に指導せられ、修業期間三ヶ月を經過した後に、この修得者が更に指導母體となり、幾多の研究所が生れ、そこで修業した者が更に研究所を設けると言う工合で、鼠算的に擴大し短歳月の間に、既に同縣下には三萬餘人の、カットウォーク技能者が激增し、他方我國の政治—經濟—產業の復舊の機運と合致し、現在に至つたのであります。

七　カットウォークの製品とその輸出の狀態

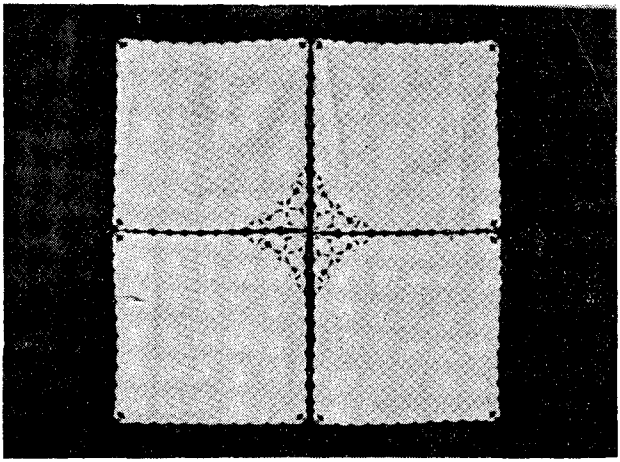
カットウォークは純然たる手藝作品であります、日本女性が戰爭によつて中斷された。手藝作品製作も、一と度復舊の機運に再會しますと、その製造技術は急激に普及し、その製品は立派な輸出品として登場して來、富山縣が復舊事業として再出發してから數へて、八ケ年の短歳月に拘らず、輸出の量は增加し、今後益々好轉上昇することは、火を見るよりも明かになりました。

元來この製產は手工業でありますが爲に、企業資本を要する工場組織も要せず、機械力に賴る必要もない、家庭工業的な仕事であり、女性の內職にても出來るのでありますから、農閑期の農村婦人の副業にも適し、手先器用の日本女性にはもつて來いの仕事であります。

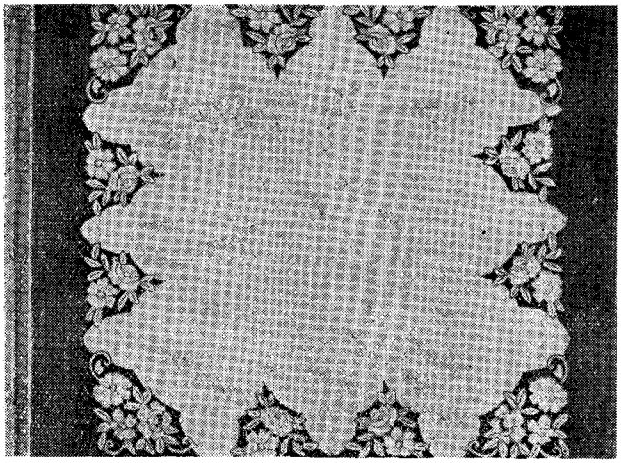
現在輸出されて居るカットウォークの製品中、その代表的なものを擧ぐれば、概ね次の通りであります。



バンケットセット
124吋 × 72吋
(縦)　(横)
價格約 30.000円　輸出先アメリカ



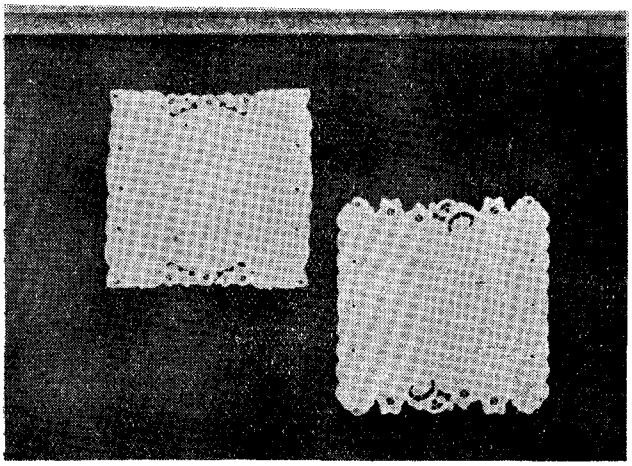
ナ　プ　キ　ン
12吋 × 12吋
(縦)　(横)
ラーブル1セットにつき，ナプキン12枚〜24枚を必要とします。



テーブルクロス

36吋 × 36吋
(丈)　(巾)

外ニナプキン4枚つく，1枚は 11吋 × 11吋
(丈)　(巾)

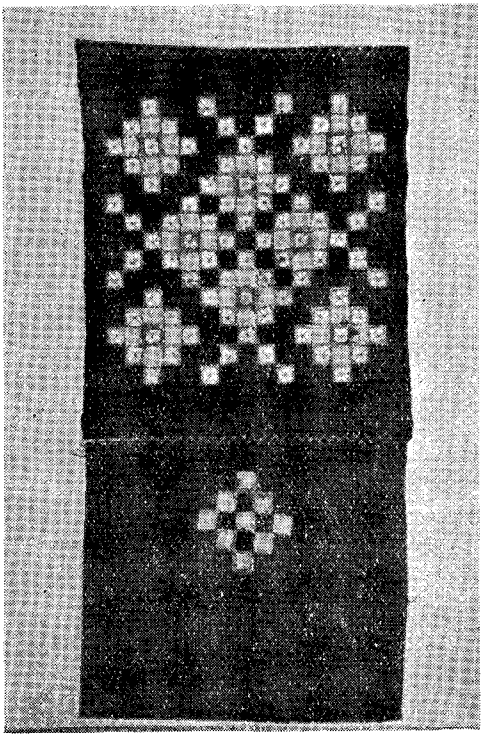


ピロケース

18吋 × 20吋
(縦)　(横)

一度に何萬ペアーの注文あり，毎月5000ペアー位は輸出してゐます。輸出先はアメリカ。

A



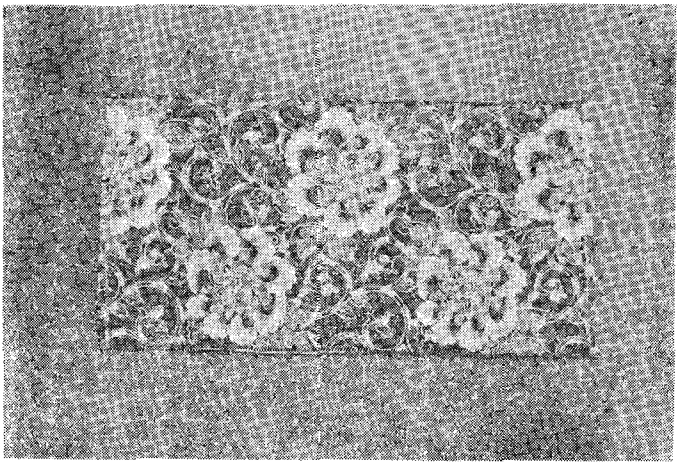
古布の利用

A　古い布團の布を利用してイス掛

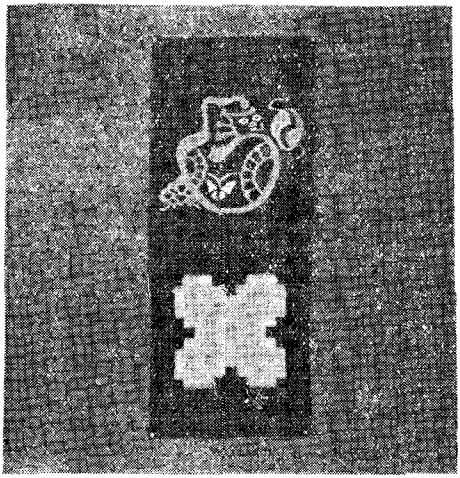
B　古い布團の布にて模様を活かし刺繍を入れてテーブルセンター

C　同　上

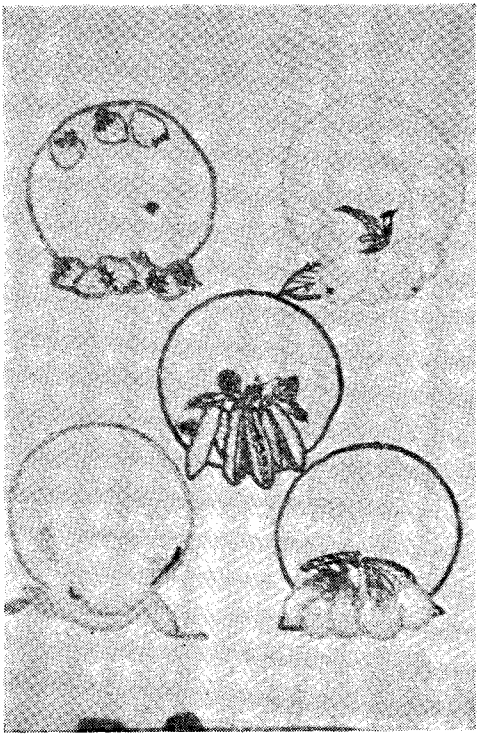
何れもカットウオーク



B



C

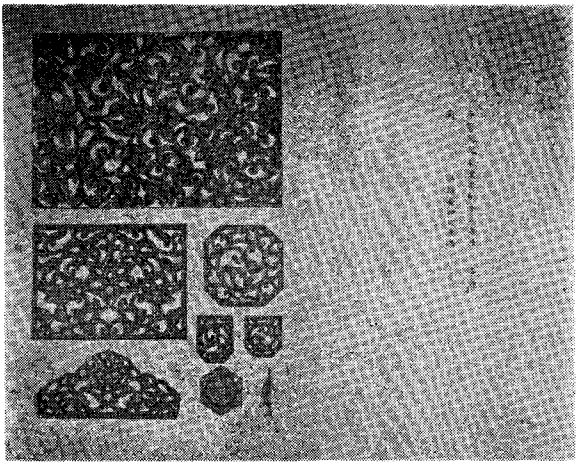


圖案の利用

果物の罐詰のペーパーの模様をその儘白地の布にうつしてカツトウオークをなし皿敷に

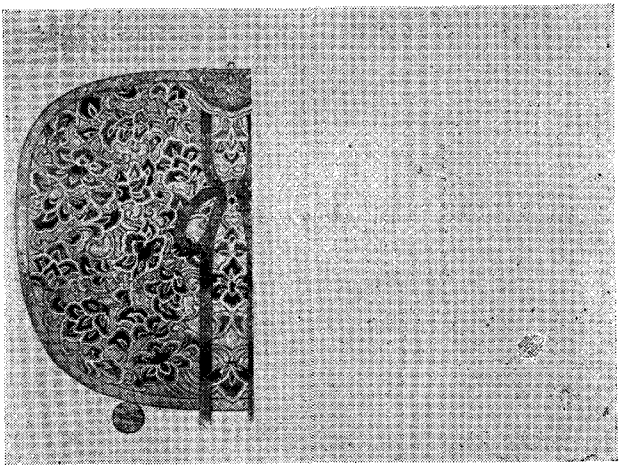
圖案の參考

A



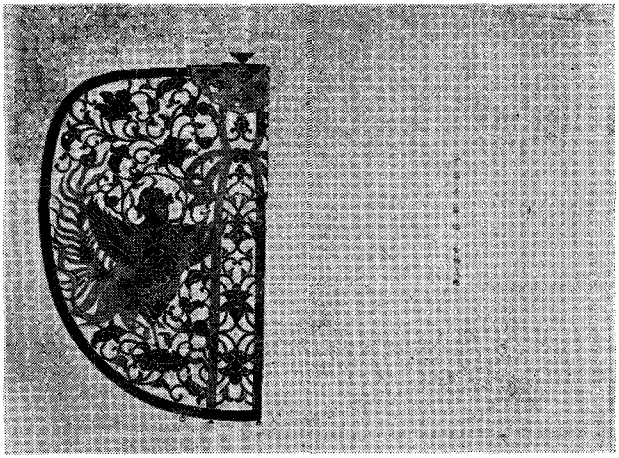
平等院鳳凰堂木彫金色唐草　各種
同　梁楹長押之金物

B



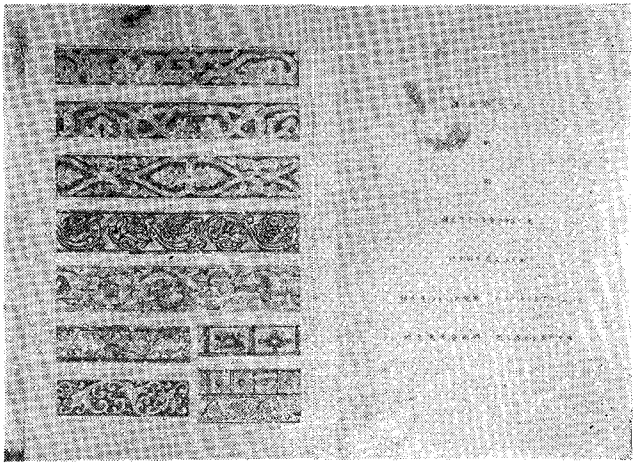
東大寺所傳牛皮彩色華蔓

C



中尊寺華幡　金物透彫

D



密陀繪文様

同

同

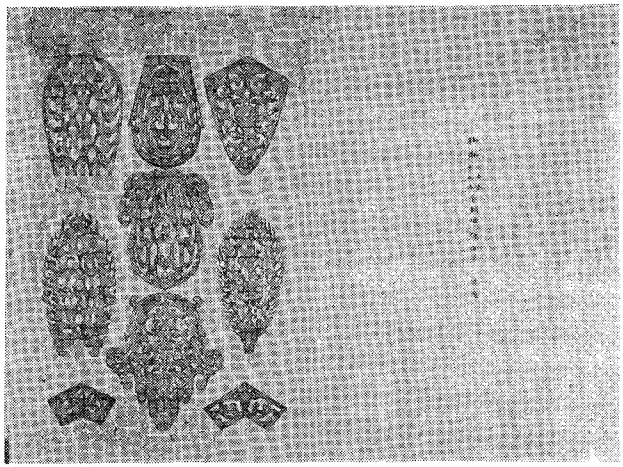
東招提寺佛像萱生薄肉文様

東大寺銀器無彫文様

東招提寺佛像萱生薄肉文様　佛像附屬金物透文様

佛像附屬金物透文様　興福寺佛像文紋

E



練九　具金幡佛銅金　隆法傳舊寺所　物御

八　カットウォーク作業の概要

カットウォークの生地は總てと言つていゝ程麻を用います。特にその麻は日本製のものを選びます。糸は日本製のマーサーコットンを用い、その原糸はエジプト綿を使用し、概ね白又はライトブルーであります。但しピロケースは麻は小量にて、それを最高級のものとされ、大部分はS/#二〇〇三番位の日本製の綿布を使用してあります。

カットウォークは全くの手藝でありまして、材料としては布と糸、器具としては一本の針にて事足りるのであります。

然もこれ等の作業は殆ど女性によつて爲されるのでありまして、作業製品の連絡は指導員を中心に一つのグループを作り、家内工業として集荷納品にするのと會社が直接に指導者を抱へ、直接運營するものとの、

二つの方法により稼働されて居ります。前者は通常支部と稱し、後者は本部と稱せられています。最近秋田や仙臺に於ても、この方法で作業を開始し、分業方式を採つて製産を高めています。

カットウォークは單なる自己の樂しみでなく、一種の企業として運營されるに至りました。

九　指導者に對する願

手藝品は機械製品のように、劃一的多量製産でありませぬ、その製品の一つ一つに精神を打ち込んだ、藝術品としてのラベルを貼り製作者の氏名を終い込んでも、決して不溫當ではないのでありまして此の信念とプライドを持つて製作に臨むべきであります。

故に手藝指導者は常に手先の製作技術のみに偏せず、社會人としての良識の涵養に努め又これを奬勵し、克く時代の風潮―人心の歸趨―思想の動向―文化の度合―等の正確なる理解と美に對する感覺の鋭敏性等に就ての教育指導すべきであります。

又輸出品に就いては、その輸入國人の持つ民族性―感覺―趣味―流行等を知り、その方面の研究調査に萬遺滿なきを保し、被指導者の智力―能力―創造力の誘發に努めねばなりませぬ。

これを要するに、指導者としての最高の資格は、技術とともに精神的にも、よき教師であらねばならないと言うことであります。

斯くすることによつて、手藝は藝術として高く評價され又手藝を通して女性の優美―耐忍―情操の高揚を圖り

教養を高め、製品にそれぞれの個性美を表現し得るものであります。

十　手藝研究者に對する願

書は格を修め、格を破り、こゝに初めて個性ある自己の書體が完成するのであります。

手藝に志し、手藝を研究する者は、それが如何に藝術的であろうとも、方式―手法を修めず、直ちに個性表現に走ることは邪道であり、無謀であります。一應は舊來の手法を修得し、然る後自己の個性によつて、新らしい創造の道を拓くべきであります。又中世―古代の手藝品が傑作であるからと、その儘模倣することは愚者の道であります。

今日世界的に有名なマチスの畫風は、初めから彼の描畫風でなかつたのであります。忠實に寫實の畫道を正直に歩んで、自他ともにその繪が認められてから、彼の靈感が劃期的な畫風の新寄軸を發見したのであります。

やたらにマチス張りの繪を描いて、得々たる人は深く反省すべきであつて、そうした繪は三才の兒童畫よりも遙かに劣つたものであります。

手藝が一つの藝術である限り、この觀念は堅持すべきであります、然うすることによつて、その人の手藝は一層の發展を招來し得るのであります。

十一　手藝と圖案

建築には建築設計圖（附工事仕様書）が在るように、手藝には圖案が不可缺であります。否寧ろ圖案が手藝品の優劣を左右し、巧拙美醜を運命づけるのであります。その用途に應へる大さ形狀—色彩—色調、點と線と圓の配置—組合せ—離散集合—仕上りの美觀等はこの圖案の巧拙に基因するのであります。

手藝の研究は一面圖案の研究であり、手藝者の意圖製作力は、既に圖案に表現されているのであります。

溫古知新、天平時代の手藝を研究して、現代の嗜好に復元するのと、一つの方法であります。

然らしてそれ等の製品が、現代人の賞讃を博するならば、その圖案は成効したものであります。

繰り返へして言うようでありますが、圖案は手藝の親であり師であり、亦命でありますから、手藝研究者は圖案に對する關心を、最大限に高めねばなりませぬ。

十二　手藝の將來

手藝の前途は眞に洋々たるものであります。然しそこには經濟的裏附を必要とします。如何なる藝術品も經濟的裏附なくして、永續は出來ないのであります。然らば經濟的裏附はとは何かと申しますと、需要卽ち望み手買手であります。買手がなければ自畫自讃的な自己滿足に止まつて、進步發展が無く、流行普及がないのであります。

自國の圖案が賞讃されたからと言つて、これを他國に押し進めることは、無謀であり愚と言はねばなりませぬ。何れの國にもその國の持つ傳統があり、生活樣式があり、思想趣味があります、よくこの點を研究して、そ

の國の希望する圖案、手藝品たらしめねばなりません、自己の手藝品を購入する輸入國人の希望を滿すものであれば産業的に製産しても成効は疑いありません。

手藝品は第三者的な觀賞品でなく、我々の日常生活に解け込んだ必要品であらねばなりません。そうしてその使命は我々の生活を潤し—美化し溫めるものでなければなりません。手藝に對しては他の何れの國の女性よりも優れた素質を持つて居る日本女性は、その惠まれた才能をより良く發揮して、自己の家庭にも之を生かし、進んでは國家産業貿易振興の一翼を荷うことこそ、國運隆盛に資するものであります。

十三　結び

手藝論が一種の禮讃となりましたことは、私自身がそれに携はつて居る關係からでもありませう。尙數字を擧げて手藝と貿易に就て申述べることも眞に興味深い問題でありますので又の機會に於て稿を更めて記述することに致したいと思つてゐます。

永年この道を歩んで來た私にとつては、手藝が私の人生であり生命であります從つて私のつたない經驗から感じることは、手藝が一つの型を造つて居ることであります。

書はその人を現はすと言います如く、手藝作品を通じて、その作者の性格—思想—趣味—教養—智性—愛情を窺知し得るのであります。

私達の手藝の道は前途極まりなきものでありまして、勉めても勵んでも尙足れりとせないのが實感であります

でありますが爲めに私達の日々はこれ研讃の連續であります。然してそれが卽前進であり發展でもあるのであります。茲に日ごろのおもいを述べてこの稿の終りといたします。

（本學助教授　被服學）